

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	遊戯 : 創作
Author(s)	土居, 寛之
Citation	龍南, 2 2 3 : 4 2 - 5 2
Issue date	1932-12-03
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7094
Right	

遊
戲土
居
寛
之

峯子は、何時も獨りで居る時に襲はれる寂しい壓迫感が今日もやつて來た時、妙に狂ほしく、裸体になつて水の中へ跳び込みたい様な衝動に驅られ、強ひて笑はうとする顔が鏡の中には歪められた泣きだしさうな顔となつて苦しんでゐた。鏡がまがつて居るのよ。まがつて居るのは鏡なのよ。僅かの時間に幾度も幾度も空氣の色は變化して、部屋の間の花瓶が明滅する様に激しくその印影をかへる程、雲の多い日だったので、峯子の氣持は更にいら／＼と外部から煽りたてられて居た。毛利がやつて來なくなつてから二日、三日と男の幻影は峯子の頭の中で溶解して行つたが、四日、五日と經つにつれて、彼女は無意識の中に「心」を忘れて行きがちだつた。透明な眼鏡の曇りにいらだつ人の様な懊惱が彼女の心にひらめき始めたが、男への愛が去り行く霧の様に白い速さで薄れて行くのを追ふ術もなく、彼女は氷河の上へどつかと腰を卸して了ひたい様だつた。彼女が不圖、眼を開いた時は、太陽が絨鍛の上で細い埃を光線を踊らせて居る

部屋にぼつねんと理性をひそめて寝て居たのでつた。先刻、あれ程狂はしく揺れて居た彼女の心は本當にあれが自分だつたのかしら、今の自分は本當の自分なのかしら、と云つた複雑な氣持を少しのもつれもなく自分の中で解剖出来る程、冷靜で、冴えきつた、透明さを取返す事が出来たのだつた。透明の鏡の中に少しでも曇りが有る時は神經が激しく波立つものだつたが、彼女の曇りは、どうしても消えなくて、本當に曇りが鏡の中に彫込まれて居るのでは無いかしらと思ふ程強く心に刻まれて感じるのだつた。かつては毛利を愛して居た。併し今は愛することがどうしても出来さうなかつた。その氣持はどんなに否定しやうとしても、底から自然に湧いて来るものだつたから、彼女が否定しやうとして焦立つ程強く胸に響いて來、自然の儘に心を鎮めて居る時はそれ程までに強くは感じられるものでなかつたが、彼女は心を鎮める事すら出来ぬ程に倒錯した自己の中に居たのだつた。僅か一瞬間、平靜な波のない海だつた彼女は、はやくも透明さが次第に雲に蔽はれて来るのを悟つたが、それは焦つても焦らないでも、とにかく又狂はしい程の衝動の中へ自己をひき入れて行くのだつた。彼女は今の自分が堪へられなくとも、過去の頁の中へ眼を落すのだつた。過去は大きな灰色とブランクと紙魚の綴つた模様とが永く永くどの頁にも充ちて居たが、その中に居る彼女の常に微笑んで居る死人の樣で、その傍に毛利が黒い影像で彼もやはり微笑んで居る。ブランクの所はまるで宙に浮いて居る空氣の樣に果てしないものだつたが、此の都分は彼女の今の悩みをすら忘れさす程に懐かしい過去の喜びであつたのだ。

その句は又となく微臭かつたが、彼女には馨しい麝香の様な芳香に思はれ、種々の想出の中には、思ふだけでも恥しくなる様な事も有つたが、どんなに彼女が記憶の糸を繰出して見ても、もはやブランクの大部分は、「時」の中に失はれて了つて、たと夜でも太陽が輝いて居た樣だつたと云ふ様な不確實な記憶ばかりが浮んだ、まとめて見れば彼女は毛穴

の中まで幸福を享けて居たのだつた、過去の日でも彼女は焦立しい感情に襲はれがちだつたが、毛利に會ひたくて堪らないと云ふ躍出る様な焦燥ばかりで何時もそれある度に生甲斐を感じて居たのにひきかへて、今の場合は、次第に失つて行く愛の後姿を見ながら惱んで居る惨めな自己のみだつた。併し彼女の今の悩みは理性を以ても情熱を以ても、如何にもし難いものだつた。たゞ彼女は三人者の立場で愛情の失はれて行くのを眺めて居るより他にはなかつた程、すべてが自然であつたから、鈍い冷いマンテル・ピースの上の大理石像はその横臥したポーズの中に少しの情熱も含んで居ない様だつた。彼女は、しかしそれが抑へきれぬ様だつた。こんな氣持が浮氣だつて云ふのなら、世の中の女つてみんなさうだわ。毛利が厭になつて來るとしても、「愛」が去つて行くのを傍觀して居るだけの私に罪があるのかしら。若し罪があると云ふのなら、それは自分を失つて了へたと云ふのね。彼女は鏡の前に置かれたハンドバッグの中からミスブランセを取出した時、淡い聯想から羽田と云ふ青年に會つた事を想出した。

ニュー・グランドで毛利から紹介された羽田と云ふ青年は華やかな情熱を奥にひそめた様な青年だつた、青年は濱の景色をじつと眺めて居たが、不圖彼女が煙草を手にした時、私語く様に、煙草をお持ちになつた女の方の指はどうして美しいのでせうかね。と云つた。羽田は指の自然の形態の美を賞めた積りらしかつた。併し青年の何處か内氣な態度にも拘はらずその言葉は、短い、醜い指の持主だと常々自分を思つて居た彼女には非常な衝動を興へたのだつた。彼女はその一本を喫終る迄に平素の彼女に似ずどんなに短い指を氣にしたかしれなかつた。そして自分の秘密の一端が此の青年に見すかされた様な氣持は、青年の溫和な中に鋭さのある眼の光を見て更に強められた。

港の景色は額の中に入りたい程靜かですわねえ。えゝ、今日は疊つて居るからですが、晴れた日はとても活潑なん

すよ。今日なんぞ汽笛の音まで沈んで居る様に思へませんか。人々が「旅愁」を感じるのも、今日の様な日なんでせうねと彼女の問ひに對して青年は素直に答へたのだが、素直であればある程、皮肉の様に思へた、彼女の不安な聯想の中の青年に彼女は今日會つて見たいと云ふ好奇心も湧いて來たし、獨りで居る事の堪へられぬ彼女の氣持もそれによつて鎮められるだらうと思つたので、彼女は會ふ事に決心した、それはほんの氣紛れであり憂晴らしの積りだつた。だが愈青年が承諾して、直ぐやつて來ると返答した時には、何となくそわ／＼した氣持になり、相手が異性で有ると云ふ事も何かしら重大性を持つて居る様だつた。

羽田がやつて來た時、峯子は待兼ねて居た様にドアの内側に立つて居た。お待ち兼ねの様でしたね。いゝえ——あの、失禮ですけど部屋の中が散らかつて居ますから外でおつきあひ下さいませんか。何處でも。青年は訝氣に彼女を見た。だしぬけと云へば本當にそうだつた。殆んど係りあひも無い女からの電話、言葉を交した事も碌にない女がだしぬけに彼を呼んだと云ふ事は、彼にとつては單なる女の氣紛れなんぞと想像する餘地すら無い事だつた。

彼女は清楚な外出着に身を包み、羽田のコツ／＼と云ふ靴音に歩を合せながら家を出た。彼女は自分で男を呼んだ以上、こちらから話掛けねばならぬ事は知つて居たが適當な言葉が見つからずに間誤ついた。橋の上で風が横なぐりに裾を亂しそうだつた。跛の老毛の黒犬も、濡へて居る河底の泥臭い匂もほのかに感覺到うつるのみだつた。わざ／＼お呼びたてしまして本當に相済みませんけれども、事實を云ひますと私、何も大して用ではございませんの、唯獨りで淋しかつたものですから、ほんの氣紛れにお呼びしちやつて、悪くはございませんでしたから。いゝえ、ちつとも。僕だつて毎日ぶら／＼して居るんですから。ですが、毛利さんは近頃、どうして居らつしやるんですか。近頃、ちつとも來な

いんですよ。だもんだから遂に寂しくなつてしまひまして。それぢや毛利さんも、熱が冷めたんぢやないんですか。羽田は流石に言過ぎたと思つたのか、冗談に紛らさうと努めて笑つた。その笑ひ方の中にも青年は何か高貴なものを浮べて居ると横顔から彼女は見てとつた。若い男に似ず青白い顔をして居たが、しつかりした顔貌だと彼女は思つた。クロフォオルムの匂がするのではないかと思はれる程に神経質な侵し難さが有る様に見えた。此の儘歩いて居ても仕方が無いので、何處か落着いた喫茶店に入る事にした。

彼女は身體を落着けると次第に大膽な自己を取戻して來る様だつた。そして獨りぼつちの時に味はつた焦燥が、モヒ中毒患者がモルヒネを與へられた時の様な爽かな、軽い氣分に變つて行くのだつた。あなたは情熱と云ふものについてどんな風にお考へになります？ 恐らく戀愛の經驗があらう羽田に對する好奇心がこんな質問をさせたのかもしれないなかつた。情熱つてものは誰にでもあるものです。併しどんなに沸騰しても、仲々破裂しないものです。戀愛をする時は何時も情熱では無くて始めの内は理性でやつて居るんですね、それぢや、あなたも随分戀愛の御經驗があるんですね。羽田は當惑した様に峯子を見た。全く民にかけられたと云ふ氣持で。そう云ふ譯でもないんですが、上の感想は、いはゞ僕自身だけの事なんです。

既に夜に入つた事を知らせる様に室内の灯は白い輝を増して羽田の吐出す煙がテーブルの上で動かない程に空氣は靜かだつた。久し振りのガリクルチの、「故郷の人々」の奇矯さに兩人は口を噤んで、峯子は羽田の方を、羽田は眼を反らして邊りを見廻して居た。理性のみの愛、なんて私にはどうしても考へられないわ、彼女は羽田の解答が如何に自分の場合を裏切つて居るかと云ふ事を考へて見た。彼女は一度。毛利への情熱を失つた時、既に理性は少しの愛情をも毛利

に感じなかつた事を思ひ出した。毛利との戀の動機も、すべて唐突なもので、理性なんぞ微塵もなかつた事を記憶して居る。彼女はこんな風にものを考出すと、妙に頭だけが胴體から切離されて宙を浮いて居る様に感じられ、何か考へて居ても終ひに何を考へて居たのか忘れて了ふ様な放心状態に陥りがちだつた。羽田さん——と彼女はぼんやりして居る男の氣持を引戻す様に云つた。そして何か此の呼掛の中に親しみを含めて居る氣がした。羽田さん、實は私、毛利が厭になつて來ましたのよ。蓮葉な女が新しく戀を感じた相手に媚びる見え透いた文句と思はれても仕方のない事だつた併し彼女が今日、此の青年を呼んだのは此の苦惱を打明けやうと思つてしたのではなかつたか。秘かに彼女は此の事を告げる機會を待つてゐた。そして羽田に自分のやるせない氣持の相談相手になつて貰はうと考へて居たのだつたが、逆の結果がふりかゝつて來さうだつた。羽田が峯子が自分が好きになつて居るらしいぞ、と思つて來だした時に、こんな謎をかけた言葉を與へた事は、更に羽田をして峯子の心理を讀ませる逆説的な効果だつた。

失つた愛情を取戻す事は難かしい事だと私、思ひますわ。熱烈な戀をした人は醒め方も速いそうです。ぢや、私もその方なのかしら、峯子は自分の心の秘密の鍵を與へて了つた羽田の眼を凝視する事が恐しい様に、努めて視線を反らして居た。私は今、とても寂しくて堪まりませんの。何故なんです。あなただつて、生活に希望がなかつたら、楽しくは有りませんか。そりや、僕だつて寂しくなつて了ふでせう。けれども今日はあなたにお會ひ出來て、私本當に嬉しくて堪まりませんわ。本當に——何時か、はじめてお會ひしましたのは何處でしたつけ、ニューヨーク・ホテルでした、さうでしたわね。夜の濱はきつと美しいでせうね。濱の異國情調を本當に味はふとするなら、夜でなければ駄目です。私、もう一度、あのホテルのルーフから眺めて見たい様な氣がしますわ。——何時ですかしら。まだ八時になりま

せんわ。連れてつて頂けませんかしら。あなたさへ、宜しければ今直ぐでも。それぢや、行きません事。

彼女が總てを支配して居る様に、羽田はそれに従つた。二人は外に出ると、夜風が冷やかに肌に觸れた。思はず身が顫ふ様な夜だつた。彼女は自動車に乗つても、わざとらしく羽田の胸に顔を埋める様にした。羽田は女の肉體の細かな蠢きと、昂奮させる様な體臭を匂ひ乍ら、不思議な女の頭髮の上で酔つて居た。女の持つ弱さが逆に強さとなつて男を支配して居る。女の情熱は男の理性を霧の様に包んで了ふ。霧が壓迫する。白い女は唯花の様に咲いて居るものなのに息の中に包んで了ふ魅力がある。霧の中の警笛。港では哀調を帯びた汽笛が街の隅々に流れて居る様だ。車体は急にカゝツた。横づけだつた。グリルは絢爛に輝いて居た。ルーム。酒。繊維のやうに、疲れた氣持だつた。お酒はお飲みにならないの。少しならお相手しませう。少しだつて？——遠慮なさなくつたつて構ひませんわ。今日は私酔ひたいんですの。何から何迄癪に觸つて——私、本當にあなたと二人きりで嬉しくて堪りませんわ。やつぱし、「愛」を感じて居るんですかしら。「愛」なんて、きざな言葉だと思ひになるでせうね。いゝえ、ですが先刻毛利さんが厭だとあなたは仰有いましたね。えゝ。あなたは本氣で仰有つたんですか。えゝ、本氣です。浮氣な女だと思ひになりませうね抑へる事が出来ない私なんぞは、まともな生活は出来ない性なんですわ。厭になると云つても何か原因でも有つたんですか？——それとも。唯、譯もなしに嫌ひになるなんて事は言はれませんのですかしら。理由なんぞ有りませんわ。ほんの氣紛れとでも云ふのですか。峯子は強い酒を無理にあふつた。捨鉢な女の氣持を男の前に投出して、訴へる風に併し羽田は冷やかに凝視する許りで有つた。

彼女の持つ秘密の鍵を握り、あらゆる條件を彼女から與へられても、たほ冷靜な青年は、彼女にとつては餘りにも奥深

く潜められた情熱の持主だつた。下へ行つて踊つて見ませんか？踊つてもいいんですか。ええ、一度だけで結構ですから。兩人は下のホールへ出た。ブルースが始まる時だつた。オーケストラ。滑べる床、社會は裕福だつた。廻轉する、リズムの、脚の足の、廻轉する、テンポの、陰影のない、音が支配する。無言の、社會だつた。二人が踊り終つて靜かにホールを出て行く時、あらゆる印影が濃く迫つて、墓地の中へ沈んで行く様な冷氣に晒された。今夜は遅く迄つきあつて頂いて有難う御座りました。久し振りで愉快な夜が過せましたわ。峯子の酔ひは激しかった、彼女の吐く息が闇の中に漂ふ度に、身體が闇の中を白く崩れさうだつた。

街道を車は走つた。窓を明けて下さいませんか。これちや寒過ぎませんか。いゝえ、私、身體がほてります。羽田は背廣の襟を立てた。今走つて居ますの？揺れませんわね。走つて居ます。スピードが有ります。走つて居ますから今曲つたんぢやございませんか？いゝえ、眞直に走つて居ます。何處へ。東京へですよ、急に自動車は大きくカーヴした。峯子の身體が窓際へ強く打附けられて、又羽田の方へ崩れかゝつた。羽田はそれを脇で押返す様にしたが、女の肉體は靈魂を失つて居た。併し何時とは無しに峯子は意識の中に居た。御迷惑でしたわね。あなたまだ居らつしやるの。私、知つて居りますわ、あなたがどんな氣持でゐらつしやるか。接吻なすつても構ひませんわ。私、酔つて居るかも知れません。何だか謔言の様に峯子は言つて居た。ドアは何處ですの。あら、外の方が動いてますわ。ちら／＼とお魚が跳んで行きますわ。あの明るい所、遠いんですね。掴めませんもの。此處で僕下して頂きます。羽田は峯子の耳に言つた。降りるんですつて。降りて、どうなさるの、私、心細いわ。此處に寝ても構ひませんか？彼女はもう、羽田の言葉を忘れた様に、シイトの上に泳ぐ様に横になつた。意識の中の彼女は極めて大きな無意識の中に寝て居た。

鋼鐵の様に冷いトンネルが永い間、黒く續いて、階段とドアを一瞬感じさせた。カーテンの奥からトンネルが次第に遠退くと、褐色の空氣が硝子を通して去つた。流れて居る物があつた。朝の氣配だつた。峯子は夜の裏に住んで居たのだ。低く垂れた天井を感じて、燐寸を擦つて見ると、カーテンの向ふが白んで居る。置物の輪廓がほのぼのと漂ふて居る。自分自身の部屋だつた。

幼い時、小學校の時を想ひ出して頂ければ結構です。私たちはきちんと教室の中で縦横に並んだ字を讀んだり書いたりますます時に、身體中がむづ／＼して、いやな蟲が背中の上を這廻つて居るのでは無いかと思はれる程でした。そして私たちは、どんなにベルの鳴るのが待長かつたか知れませんでした。唱歌の時間はよく生徒達が輪になつて、お遊戯をしたものです。その時間の私達の楽しみは又格別で、學校が退ける迄お遊戯の時間が續いて居て呉れたら、とどんなに子供心にも願つた事ですか。お遊戯——遊戯ですね。私たちは四六時中緊張した生活の中で本當に生きる事が出来るならば、本當の生甲斐を感じる事が出来るのでせうが、時々人生の中にも遊戯が欲しくなる事も有りませう。そして、その時人々は寧ろ人生よりも眞剣な氣持になりたがるのは何故でせうか。私たちは學校に行つても四十五分の授業中は、十五分の休憩時間がどんなに待遠しかつた事ですか。僞らずに云へば私が學校に行くのは、あの十五分の休憩時間の爲だつたと思へます。そんな私の態度は不遜でせうかしら、人生には休憩時間が有りませんでせうか、私は遊戯をして見たくになりました。併し遊戯だと云つて侮る譯には行かなかつた様です。私は、知らず／＼遊戯の中で人生よりも眞剣な氣持になりさうでしたので、これは本當の私では有りませんよと、秘かに自分を窘めて居りましたが、遊戯がそれ程に

楽しいものとは知りませんでした。

沙漠をお考へ下さい、沙漠の旅は真剣な人生でせう、そしてオアシスを見つける事の楽しさを人は遊戯だと言へませうか。それも立派な人生の中に生きて居るものでせう、併し人は何時までもオアシスの中で生活はして居りません、やがて又沙漠の旅をとぼ／＼と續けて行きます。苦しい沙漠の旅——。何故なんでせうか。宿命だと言へば恐ろしい氣持がする許りです、今日、私はあなたからのお言葉を享けてから、種々の事を考へました、遊戯、と云ふ言葉が浮んで來ました時、はつ、と思ひあたる事がありました。追想は夢の様で、夢を自分から造つて行くだけだと思ひましたが、夢には色が有りましたでせうか。自己を辯護して居るとはお思ひ下さいますな。私は、やはり私が一番自己の醜さを知つて居ります、歪んだ唇を憎惡する氣持で一杯です。卑怯なのも私です。遊戯などと云ふ言葉の中にあなたとの戀愛を片附けて了はふと思つて居る私を御想像になりませう、本當に私はさうなんですけれど、遊戯だつて人生の中に生を享けて居る事をお考へになれば、どんなに私を喜ばしたかと云ふ事もお考へ下さいますでせう。私は毛利との戀愛と、あなたのと、どちらが本當だつたか判らなくなつて了つたのですが、唯解つた事はあなたとの僅か一句の交際が長い間の毛利とのそれよりも幾層倍もの楽しみを與へたと云ふ事なのです。それなのに私はあなたから去つて行く、と云ふ不合理をあなたはお責めになるかも知れません。併し沙漠の旅人として私は何時までも楽しいオアシスの中に棲む事は出來ない様です。苦しい旅が待つて居ります。詭辯だと仰言つても、卑怯だと仰言つても構ひません。若し毛利との交際が無ければあれ程迄にあなたとの交際が私の心を奪ふ事は出來なかつたらうと思ひます時——おや、よく耳をお澄まし下さい。ベルが鳴つて居ますわ。人生の授業が始まります。鳴りもしないベルに事寄せて、私が逃げて行つて了ふと

仰言るのですか。も一度お聞き下さいな。微かに鳴つて居るぢやありませんか。あなたは理性が愛するとか仰言いました。私はあなたが理智に富んだ方で有る事を喜びます。私の去つて行く事なんぞ、あなたの理性がお悩みになる事はないと信じますから。

峯子は循環する現實の中に宿命を噛つた。愛情を失つた毛利の許へ、羽田の手を振切つて歸らうとした時、街には一つの噂が流れて居た。毛利の胸に咲いて居た白い花は彼の手によつて無慘に奪取られて、赤い花が新らしく彼によつて求められた。併し悲しき白い花は投捨てられた事をすら知らなかつた——と。峯子は指輪を抱き乍ら乳色の街頭で意識を奪はれて居た。

(完)